
機巧アリスに口付けを

水守秀一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機巧アリスに口付けを

【Nコード】

N9026X

【作者名】

水守秀一

【あらすじ】

Automatic Livingdoll Common (Custom) Edition。通称アリス。

高度な知性を備えた女性型アンドロイドの普及する21世紀末の東京。

彼女らの人格改修を生業とする男性、朝倉冬治は、ある日一人のアリスに出会う。

「先生、アリスが希うなど、馬鹿げているとは思われませんか？」

- Prologue (前書き)

タイトルが読みにくいので補足します。

「機巧アリス」は「からくりアリス」と読みます。

- Prologue

- Prologue

あれはいつのことだったか。

錆色の空が重たい雨を吐き出し、小さな肩をしとどに濡らしていたことを覚えている。澄んだ大きな瞳が切なそうに震え、冷たい雨と交じり合った涙が白い頬をそつと伝っては、制服の襟に染みをつくっていた。

もう会えないわけじゃない。永劫の別れとはとても呼べない。ありふれた、つまらない別離に過ぎないはずだった。だけどその涙が、悲しげに遷ろうその瞳が、二度とはこない再開の時を余りにも強く予感させていた。

たった一人の家族だった。互いに父は無し。オレの母の行方は知れず、彼女の母は、何年も前に異国で凶弾に倒れたと聞く。血の縁はなく、何が共通したわけでもない。ただ幼いころより、それしかすぎるものはないかのように、また北に咲いた一輪の花が只管に雨のみを待ち続けるかのように、互いに身を寄せ合って生きてきた。

だから笑えなかった。幸せにつながる別れなら、微笑まねばならないと分かっていた。笑顔で、とびきりの明るい声で、送り出してやるべきだと知っていた。それでも。

「冬治……」

冷たく悴んだ手で俺の制服の袖をつかみ、彼女が呟く。雨と涙をためた瞼が刹那強く閉じられ、同時に指先にも力がこもる。

「絶対、絶対忘れないでね……」

遠慮がちに開かれた瞼の中で、ダークブラウンの瞳が揺らぐ。悲しみを湛えたそれは、苦痛に歪んでいるようにすら見えた。

「待ってなきゃやだよ？絶対待っててくれなきゃ、やだからね？」
追い詰められた心が、透き通ったソプラノまでも蝕んでいく。喘ぎ

に似た眩きに、俺はただただ、何度も頷いてみせることで答えた。ほっそりとした体軀をそつと抱き寄せ、両の腕に力を込める。

「っ……っ」

辛うじて言葉を成していた彼女の声は、俺の胸に顔をうずめると同時に、水分を含んだ嗚咽へと変わった。

大丈夫。お前の気持ち、ちゃんと届いてるから。絶対に忘れないから。ずっと待つてるから。

口を開けば叫んでしまいそうで、ただ彼女を困らせるだけの台詞を、何度も叫んでしまいそうで。

胸の中で、彼女の問いかけへの答えを幾度も眩きながら、俺は天を仰ぎ見る。

また会おう、必ず。そうしたら、そうしたらその時は。

頭の奥に、胸の奥に、彼女の弱々しい嗚咽が、いつまでも響き続ける。愛する人の奏でる、悲哀の音色。俺の記憶にある、彼女の最期の音色。

彼女は、戻ってこなかった。

- Chapter . 1 アリサ 【1】

- Chapter . 1 アリサ

「T3200、聞こえるか？」

少女がゆっくりと瞳を開く。その様を確認し、俺は胸に抱えた小型端末に電子ペンを走らせる。SystemAllGreen。ベツド脇に腰掛けて上体を軽くひねり、寝そべる少女の額に手を当てる。そのまま首筋に指先を滑らせ、脈拍を確認した。

「OKだ。T3200、起き上がってみてくれ」

体温調節機能及び脈動、触診上も問題なし。小さな掌を軽く握り、少女に身を起こさせる。数秒の沈黙。突如はつとしたように大きな瞳を見開くと、少女は俺の手を乱暴に振り払った。

「き、気安く触らないでよっ。このヤブ医者っ」

甲高い声で叫ぶと、素早く身を引き細く端正な眉を吊り上げて俺をねめつける。僅かに上気した頬が、LEDランプに照らされて妙に輝いて見える。

「それから、わたしはアリサ。型番で呼ぶなヤブ医者っ」

頬を膨らませ、眉間に皺をつくって怒鳴る。無駄に声がかい。

「だったらオレのこともちろんと呼んでくれ。医者じゃなくて調律師だしな。朝倉先生、とか、冬治さん、でもいいぞ。ヤブなんてのは論外だ」

優しくそう言ってみれば、小さく鼻を鳴らしてそっぽを向く。一つため息。だがこれでいい。

「で、気分はどうだ？」

端末をサイドテーブルにそっと置き、もう触れないよと両手を開いて見せてから、問いかける。鋭い眼光はそのままに、少女は呟くように答えた。

「いいわけではないでしょ……。あっちこっち触られたし……」

ようやくと俺から視線を外すと、不快感と羞恥心がぶり返したのか、少女は僅かに目を細めた。

「診察の一環なんだから、仕方ないだろ？それにもう終わったんだ。あんまり怒るな」

サイドテーブルの端末を再び手に取り、部屋の隅に設置されたデスクに移動する。引き出しから親指程の金属棒を取り出すと、先端を液晶画面に向けた。小さな駆動音と共に、金属棒に刻まれた1ミリ程の溝が赤く明滅する。同時に小型端末の電源が落ちた。オートマティックシール。液晶画面のハードキャプチャを瞬間的に取得する道具だ。デスクに備え付けられている大型の液晶パネルと無線でリンクしているため、この操作で小型端末に入力した内容は全てデスクの本体に移されたことになる。今更だが、便利な世の中になったものだ。

「兎に角、どこか異常はないか確認したい。お前の感覚でいい。調子はどうか？」

デスクの上のプラスチックボトルを手に取り、差し出しながら尋ねる。ボトルを受け取り、軽く伸びをしてみせると、少女は頷いた。「問題ない」ととって良いようだ。

「ならいい。作業はこれで全部完了だ。お疲れ様」
ほっとしたせいか、直前のやり取りを一瞬忘れた。頭でも撫でてやるうと手を伸ばし、思い切り振り払われる。続いてボトルが飛んできた。

「触んなって言うてんでしょっ」
寸でのところで身をひねって避けたボトルは壁にぶつかり、サイドチェアの上へ。置いてあった小型端末に少し、モノトーンのワンピースに盛大に、内容液をぶちまけた。

「……」
大きくため息。さすがにやりすぎたと思ったのか、少女も押し黙る。「寝てる。お前」

叱責の声に身構える少女にそう告げると、サイドチェアに向かっ

た

アリサが眠ったのを確認し、自室に戻った。自室は職場と屋根を同じくする居住空間の一室で、先刻までアリサの罵詈雑言が響いていた研究室とは、廊下を一本隔てた真向かいにある。固めのソファに腰を沈めると、サイドテーブルに備え付けられたタッチパネルに指を滑らせた。広さにして8畳程の洋室の隅、簡素なキッチンからゴトゴトとミルの挽かれる音が響く。背もたれに完全に身を預けると、天を仰ぐようにしてゆっくりと目を閉じた。

Automatic Living Doll Common (Custom) Edition。通称アリス。10年ほど前に国内最大の精密機器ベンダーであるPhysical Illusion社から発売された女性型アンドロイドだ。15歳女性程度の思考能力と語彙力を有し、10歳女性程度の運動能力を備えている。極めて精緻な人格プログラムと体表を覆う人工皮膚の恩恵で、外貌と行動だけで見たのなら、人間の少女と僅かほどの違いもない。一体1250万円という高額な商品であるにもかかわらず、アリスは発売から僅か1年で100万体制を出荷。Physical Illusion社は発売年度の業績予想で、当初発表に比して経常利益270%増ともなる上方修正を最終的に迫られた。世紀末も近い近年、21世紀最大のヒット商品ともなる可能性を秘めているとして、全国的にアリスの販売強化キャンペーンが勢いを増している。

「子室に恵まれなかった夫婦の究極的な癒しとして、あるいは、永続的に稼働し続ける最強の家事手伝い、ベビーシッターとして」Physical Illusion社のアリス開発プロジェクトを特集したドキュメンタリー番組で、以前販売責任者がそのような発言をしていた。だが妄言だ。開発プロジェクトの定義段階でどれほどに清廉な目的があったかは知らないが、アリスの爆発的なヒットの理由は他にある。それはアリスの体躯の「ありとあらゆる部位」

が人間と同様の造りをもっているということだ。無論アンドロイドである以上、人間が感じる諸般の感覚は持ち合わせていない。痛みを感じることはなく、片腕が切断されようが平気で動き続ける。子を産むこともできず、涙を流すこともない。髪、睫、眉、陰毛を除いた体毛は元より生えておらず、一度抜けたものが再び生え揃うこともない。ただ、股関節付近に位置する例の部位は、極めて精巧に形作られている。出産という機能が存在せず、また排尿もしないにも関わらず、そのためのパーツは存在するのだ。それが何を意味するか等、言わずもなだろつ。

キッチンから良い匂いが漂ってきた。コーヒーが入ったらしい。サイドテーブルに再び手を伸ばし、パネルの右下の表示された「discharge」のアイコンに触れる。キッチンに置かれた円筒状の無機質なコーヒーメーカーからカップにコーヒーを注ぐ音が聞こえ始めた。部屋隅のキッチンまで数歩歩くと、カップを取り、再びソファへ戻る。砂糖もミルクも必要ない。コーヒーメーカーは事前にプログラムしてあるオレの好みにそって、それらを既に投入してくれている。淹れたてのコーヒーの香りを楽しみながら、オレはふと、アリスの顔を思い出した。

勝気につり上がった細い眉。意思の強そうな大きな瞳。大きな身振り手振りで、オレに対し怒りらしきものを訴えていたアリス。はねっかえりで強気なあの性格は、彼女の内部に組み込まれた人格プログラムによるものだ。人間のような、複雑怪奇な本物の感情、本物の意思ではなく、あくまでプログラム。プログラムによって彼女の性格は形作られ、形作られた性格に基づき、言動の決定が行われる。プログラム。あくまでもプログラム。プログラムは、書き換えられる。

「朝倉先生ですね？」

10日前、事前の連絡通りこの研究室を来訪した少女は、玄関ドアを背に優しい音色を響かせた。

「本日からお世話になります。アリスTタイプ3200です。旦那

様からは、アリサという名前をいただいております」

柔らかな笑顔で、落ち着いた口調で、少女は丁寧におれに頭を下げた。どこか仄々とした、有態な言い回しだが、春の日に降り注ぐ陽光のような暖かな雰囲気、とても印象的だった。

日に5時間、計50時間をかけ、おれは「仕事」を済ませた。アリサが非常に協力的であつたこともあり、作業は極めて円滑に進んだ。アリサの稼働状態について簡単なチェックとメンテナンスを行い、人格プログラムのバックアップを取得した。研究室に保存してあるニュートラルプログラムをコピーし、依頼主から事前に渡されていた要件書に従つて、新しい人格プログラムを生成する。完成したものを、アリサにインストールしたのが今朝方。人格プログラムを書き換えられた姫君から飛び出たのが、先ほどの罵声と言う訳だ。

「調律師 朝倉冬冶工房」。この建物の外壁には、シンプルな明朝体で記された、そんな看板が取り付けられている。助手の類はおらず、「調律師」であるおれ一人で切り盛りしている、小さな工房と名づけてはいるが、これは業界の慣習に従つただけのもので、内部は極めてメカニカルだ。旧時代的な代物とは違う。

「調律師」はアリスの発売と同時に誕生した、非常に新しい職業だ。アリスの開発プロジェクトに何らかの形で携わつた技術者が独立開業しているケースが多く、おれもその経緯を辿つた一人に数えられる。消費者はアリスを購入する際、その外貌と性格を数万種類のパターンの中から選択する。基本的に永続的に稼働するアリスは、購入者、いわゆるオーナーにとつても非常に長い時間を共に過ごすパートナーとなる。より自身の好みに合致したアリスを選択できるようにと考案されたシステムで、この販売形式がアリスヒットの原動力の一つとなつたのは間違いない。ただ髪型、肌色、顔の造り、乳房のサイズ等、それぞれの組み合わせによる外貌の選択肢が無数に存在するのに対し、複雑な人格プログラムにより構成される性格は、そう多くのパターンを持たない。それ故に、最も好みに近い性格を選択したものの、もう少し従順であれば、もっと社交性を備え

ていれば、等、購入後にアリスの性格に関して大なり小なり不満や要望を感じるオーナーが、かなりの数存在するのだ。そこで、そういった要求に個別対応するのが、俺たち調律師の仕事となる。依頼者であるオーナーからアリスを預かり、事前に記載してもらった要件書に従って、希望通りの人格プログラムを作成、挿入することで、アリスの人格を強制的に改変する。この人格プログラム改変の一連の作業を「調律」と呼び、その効果の程は、朗らかで礼儀正しかったアリスの罵詈雑言が表す通りだ。

「さて……」

コーヒーを飲み干し一息ついたオレは、ソファから大仰に立ち上がる。カップをキッチンの洗浄機上に置くと、そのまま自室を出た。洗浄機の稼動する機械音が、ドアの向こうから控えめに響く。

研究室に戻ると、すぐにデスクに向かった。腰掛けたプレジデントチェアの背後から、アリスの寝息が微かに聞こえている。本当に眠っているわけでもないだろうに。無駄に凝ったアリスの造りに、思わず失笑めいた笑みがこぼれた。

オレを含む「調律師」は、アリスの行動論理等内部システムの専門家であり、アリスの全身を覆う人工皮膚やアンドロイドとしての素体の構成等の機械的部位については然程の知識を持っていない。仔細は分からないが、確か今アリスの立てている微かな呼吸音は、鼻腔の奥に装備されている超小型ファンの稼動音だったはずだ。アリスが今スリープ状態にあるのか、あるいは本当に故障して動作停止しているのかの区別をつけるために実装された機構であると聞いている。リアルな外貌や動作を追及するのは結構なことだが、単にスリープ状態の判別が目的であるならば、体のどこかに小型のランプでもつければ良いだろうにとも思う。

デスクに備え付けられた電子パネルを操作し、アリスの調律依頼書を表示させる。パネル上に専用のペンを滑らせ、依頼書右下に調律完了のサインを記した。表示を要件書に切り替え、同様にすべての要件を満たしている旨を示すチェックを入れていく。ペンに紙と

いった旧時代の遺物を使う機会はこの10年ほどでめっきりと減ったが、パネル上で滑らせる電子ペンとはいえ、たまに使うのは悪くない。ちなみに調律完了のサインを手書きで入力するのは、これもまた業界の慣習のようなものだ。

サインが終わった2つの書類を消し、表示をスケジュールに切り替えた。アリサのオーナーが彼女を迎えに来るのは明後日となっている。調律の作業は先ほどのサインですべて完了となるので、丸2日ほど暇ができたわけだ。軽く伸びをし、さて何をしようかと思案する。

調律を開始する際、たいていのアリスはオレの工房まで一人でやってくる。アリスの思考能力は人間でいうところの15歳程度。工房の場所さえ教えておけば、態々オーナーが付き添ってくる必要はないわけだ。余程距離があれば話は別かもしれないが、まあその場合は普通、もつと近くの工房を利用するだろう。実際アリスの調律工房はいたるところに存在する。調律開始時にアリスが単独で工房を訪れるのに対し、調律完了後の引き取りは、必ずオーナーが迎えに来るよう頼むようにしている。一言でいうならば、トラブル防止のためだ。調律の成果を工房ですぐ確認してもらい、必要であれば簡単な調整程度は無料で行う。アリサのオーナーは元村というよく肥えた中年の男で、成金趣味丸出しのやや気難しそうな、はつきりと言ってしまうえば面倒くさそうな人物だった。確認段階で何かしらの注文をつけてくる可能性はそれなりにありそうに思える。

「T3200、ReBootだ」

チエアをまわしてアリサに向き直り、やや大きめの声で呼びかける。微かな呼吸音が止まり、大きな瞳がゆっくりと開いた。

「その呼び方はやめろって言ってるでしょ。ヤブ医者」

すぐに身を起こし、瞼を半開きにしてねめつけてくる。予想通りの、順調な反応だ。

「医者じゃなくて、調律師だ」

先刻のやり取りをほぼ再現しながら、立ち上がってアリサの隣まで

移動した。ベッドの上で半身を起こしたアリサに向け、右手を差し伸べる。

「起きろ、でかけるぞ」

アリサの瞳が一瞬大きく開き、すぐに伏せられた。不機嫌そうに表情をゆがめ、オレの手から目を背ける。心なしか照れくさそうに見える。

「どうした？」

問いかけると、戸惑ったように一層に顔を背けてしまった。

「なんでもない。てゆうか、何よこの手……」

ボソボソと、呟くように言う。

「ReBoot直後だから、起き上がるのに手を貸してやるうかと思っただけだ。何か不愉快だったか？」

「別に……不愉快とかじゃ、ないけど……」

こちらに視線を合わせず、また口元で喋る。不毛なやりとりがわずらわしくなつて、アリサの右手首を掴むと、強引に立ち上がらせた。強く引かれバランスを崩した少女が、オレの胸に倒れこむ。鼓動を聞くかのごとく俺の心臓部に頬を寄せ、アリサは一層に表情を強張らせた。

「怒ったか……？」

少々乱暴に過ぎたかと思い、慎重に尋ねる。少女はゆるく首を振り否定の意を示すと、視線をそらしたまま俯いてしまった。

「ふむ……」

本来であれば理解に苦しむ反応ではあるが、この反応の根源的要因は把握している。言うまでもなく、オレが改修した人格プログラムの行動分岐に準じたものだ。青春ごっこにケリをつけるように赤茶けた髪を軽く撫でると、少女の肩をそつと押す。サイドテーブルを親指で指しながら告げた。

「そこに替えの服が置いてある。直ぐに出るからな。着替えてくれ」
指差した先には、薄いブルーのワンピースが置かれている。丁寧にアイロンが掛けられ、畳み方には僅かほどの乱れもない。人格プロ

グラム改修前のアリサが、調律の折をみてやってくれた作業だ。本来の持ち主は以前この工房にいた別のアリス。要は忘れ物だが、取りに来ないので使わせてもらっている。

姫君は微動だにしない。いや、微かに頷いたか。俯いた少女の瞳に映っているのは、おそらく真っ白なりノリウムの床だけだろう。

「そこ」を正確に理解したか怪しいものだが、長く付き合っていても埒もない。背を向け、静かに研究室を出た。

- Chapter 1 アリサ 【3】

「まったく……」

何度目かのため息が漏れ出る。随分と難儀な性格になったものだ。オーナーの元村の要望に従い人格プログラムを改修したが、なぜ高い金を払い、態々面倒な性格に変えるのかとうとうわからなかった。アリス本来の存在意義を生活をオールマイティにサポートするパートナーとするならば、10日前の素直なアリサの方が何倍も良いだろうに。

自室の戸を開け、歩きながら白衣を脱ぐ。壁のハンガーにそれを掛けながら、ふと、あの有難くない呼び名はコレのせいかと思に至る。安易な発想だが、まあいい。ならばもう医者ではない。

クローゼットから外出用の上着を取り出す。この5年ほど愛用している、ナチュラルカウのトラツカーだ。細身の体にはよく似合うと自負しているが、友人らからの評判は芳しくない。本皮が醸し出すやや野生的なイメージと、無表情と揶揄される顔立ちとのアンマッチが原因らしい。無表情、上等だ。ポーカーフェイスってヤツだろう。クールでいいじゃないか。

デスクから工房のカードキーを取り上げると、再び廊下に出た。さて、新しい服は姫殿下のお気に召しただろうか。研究室のドアを軽くノックし、声を掛ける。

「アリサ……」

「いま開けたら殺すっ」

言い切らぬうちに応答があった。さっきのだんまりはどこへやらだ。「玄関で待ってる。着替えたら来い」

一人玄関へ向かいながら、苦笑する。いま開けたら殺すとは大したものだ。オーナーと同状況に対峙しても、同じ台詞を吐くのだから。調律を行う際、オレ達調律師はアリスに対し、少々特殊な処理を施す。オーナーに対してと、実際に作業をする調律師に対して、対

象のアリスが同一の態度をとるよう仕向けるのだ。コレを行うか否かで、調律完了後の成果確認の難度が大きく変わってくる。

アリスは自身のメモリの中に、印象値と呼ばれる変数を保持している。自身が関わった人間、新しく存在情報を得た人間に対して、それぞれ個別に印象の良し悪し、インパクトの強弱を数値化して保有するのだ。印象値は0から10000までの整数で、この数値が大きいほど対象の人物に対して好意的な態度をとるようになる。0であるならば会うだけで顔をしかめるだろうし、逆に限界値の10000であるならば靴の裏ですら喜んで舐めるだろう。値は本人がそのアリスとどのように関わったかでリアルタイムに変動し、元の数値が両端、0もしくは10000に近い数値であればあるほど、一回の関わりにおける変動幅が小さくなる。オーナーはアリスを新規に購入する際、自身に対するこの印象値を任意に設定し、さらに数値低下に対するプロテクトを掛ける。このプロテクトにより、オーナーに対するアリスの印象値は低下することがなくなる。アリスが自身のオーナーを嫌ってしまうという状態を避けるためだ。便利なシステムではあるが、個人的にはあまり賛同する気になれない。極端な話最初に10000の印象値を設定してしまえば、例えばそのオーナーがアリスを毎日のように迫害しようとも、アリスは精一杯の愛情をその人物に注ぎ続けるのだから。

現在のアリスの元村に対する印象値は9570。オレに対する印象値も9570。元村に対する値は元来のものだが、オレに対するそれは、調律開始時に改変した言わば偽りの数字。アリスは印象値に基づいてその人物に対する態度を決定する。オーナーに対してと同一の態度を取らせる処理というのが、つまりこの改変を指すわけだ。ちなみに工房訪問時のアリスのオレに対する本来の印象値は6800。オレに対する好感の度合いが1.5倍になった結果、呼び名が朝倉先生からヤブ医者に代わるのだから素晴らしい。プログラム改修後のアリスの性格がいかに捻くれたものかが良くわかる。

玄関にかがみこみ靴紐を結んでいると、背後から乱暴な足音が聞

こえた。どうやらご到着らしい。さて姫君、新しいドレスはお気に召しましたでしょうか。

「ちよっと。何よこの服っ」

振り返るより先に焦ったような台詞が飛んできた。やはりそういう反応か。目を合わせるのは中止し、ことさら時間を掛けて靴紐を結ぶ。

「スースーするし、変なフリフリついてるし……。ていうかこっちは見なさいよっ」

キンキンと五月蠅い。仕方なく振り向くと、淡いブルーのワンピースに身を包んだアリスが仁王立ちしている。頬を僅かに染め、小さな両の手は胸元で握り締められている。「フリフリ」は、どうやら肩口のレースの装飾のことらしい。

「フリフリは知らんがな、スースーはしないだろ。そんな感覚を認知する機能はついていないはずだ」

「言ってみただけよっ。いちいち煩い」

一層に声が大きくなる。火に油を注いだらしい。だが改修結果を確認するには良い流れだ。少し好意的な意見を述べてやることにする。「だが何が不満なんだ？アリスに良く似合ってる。すごく可愛らしいじゃないか」

優しい口調を意識しはしたが、感想そのものに偽りはない。アリスは文句のつけようのない美少女だ。少々幼い印象はあるが、それだけにこの手の服は良く似合う。まあ容姿に優れているのは、大抵のアリスに共通して言えることでもあるが。

「どうした？」

ただでさえ大きな瞳をいっばいに見開いたまま、アリスは硬直している。下から瞳を覗き込むと、先程研究室でやってみせたのと同じように、視線をそらして俯いた。

「どうしても嫌なら着替えなおしてきてもいいぞ。まあその場合、さっきの服しか選択肢はないが」

多くのアリスは工房を訪れる際、着替えの類を持参しない。余程滞

在が長くなるなら別だが、精々が2、3週間の滞在なら、そういったものを必要としないのだ。アリスの体を覆う人工皮膚は見た目や触感こそ人間のそれと近似しているが、結局のところ人工物。発汗に代表される代謝現象は起こり得ないし、付着する菌や汚れの類も、ある程度のレベルまでではあるが、自動的に分解することができる。排泄はしないし、月経も迎えない。帯下等の分泌物とも無縁だ。つまりはそうそうに汚れることがないのだ。今回のアリサも例に漏れず、替えの服は持参してこなかった。さっきまで着せていたのはアリサにはあまりに大きすぎるオレの部屋着。本人が着てきた一張羅は、今朝方のスリープ解除時の大暴れで、姫君御自らオイルまみれにしている。

「さて、どうする？」

立ち上がって少し膝を折り、アリサに目の高さを合わせる。小さな唇が動いた。

「ほ、ほんとに、変じゃない……？」

予想通りの感情分岐。極めて順調だ。

「ああ。すごく可愛い」

言っていてやや気味が悪くもあるが、我慢しよう。次に彼女が口にする台詞は恐らく

「じゃあ……これで、いい」

思い浮かべた言葉と、少女の発した音声が綺麗にリンクする。調律の成果はやはり上々のようだ。

「よし」

まだ少しふわふわして見えるアリサに靴を履くよう促すと、玄関ドアを開け先に外に出る。開いたドアを靴で押さえアリサを待ちながら、何とは無しに空を見上げた。雲ひとつない青空が広がっている。これ以上ないくらいの快晴だ。

- Chapter 1 アリサ 【4】

「お待たせ。うわ、いい天気」

靴を履いたアリサが、ひよこひよここと玄関から出てきた。オレがそうしたように、青空を見上げて大きな瞳を細めてみせる。微笑ましくもあり、馬鹿馬鹿しくもある光景だ。僅かに毀れた笑みにアリサが気づく。目ざといことだ。

「何よっ？」

馬鹿にされたとも思ったか、もう頬を膨らませている。

「いや、よくできていると思ってな。見た目じゃわからんが、眼球の中にあるのは超高精度レンズだろ？眩しさは苦痛ではないはずだ」

「そりゃまあ、そうだけどさ……」

露骨な機械扱いに不満そうにしながら、気分よ気分、などと嘯く。それにしても、ころころとよく表情の変わるアリサだ。我侭なのは大きい欠点だが、見ていて飽きないという意味においては、この性格も悪くないかもしれない。いや駄目か、それじゃただの玩具だ。

「そういえばアリサ、お前何センチだ？」

カードキーで玄関ドアに施錠しながら、アリサに問うた。すぐに、良くない聞き方だと気づく。訂正しようとしたが、少女の反応の方が早かった。

「何センチって、どこのサイズ？」

当然だ。アリサに対しては、この手の聞き方をしても伝わらないことが多い。蒙昧に過ぎるのだ。

「済まない。聞いたかったのは身長だ。車に乗るんでな」

この20年ほどで、いわゆる自動車の性能は著しく向上した。車体そのものの頑強さ、事故時における搭乗者の保護機能。個別に上げればきりが無いが、その代償として、搭乗時にはやや手間が掛かるようになった。

「ああ、登録か。ちょっと待って」

今度は質問の意味を理解したらしく、立ち止まって最新の身体情報の取得を開始する。眼球の中央部、人間で言うところの瞳孔の部位に一瞬青白い光が明滅し、直ぐに消えた。スキャンが完了したらしい。

「154.23895。あ、ちょっと縮んでる。変なの」

スキャンに掛かったのは約2秒。便利な機能だ。まあ小数点以下は不要な情報だが。

「体重は？」

「ななじゅ……ってちょっと待った」

気が付いたようだ。車に乗る上で必要な登録情報は身長のみ。体重はシートが自動的に感知する。

「良く気づいたな。だが10の位は聞こえたぞ。中々の重量感だ」

「このっ……」

悔しそうにセラミックの歯を軋ませる。ちなみにアリスは基本的に重い。骨格始め内部は機械なのだから当然だ。見た目、触感、動きの滑らかさ。いかに人間に近づけようとも、重量は誤魔化せない。見た目から予想するに、アリスがもし人間の女性であったならば、恐らくは40キロそこそこの体重しかないだろう。騙される購入者もたまにいと聞く。お姫様抱っこにチャレンジして腰をやるパターンだ。

「ほら、いくぞ」

工房前に停車してある車に向かい、運転席ドアのスリットにカードキーを滑らせる。車のキーと工房の鍵は同一化している。便利だが、紛失した際の被害は大きいだろうとも思う。運転席に乗り込み、内側から助手席ドアのロックを解除した。アリスが乗り込んでくる。

「ねえ身長が縮んだの。前回スキャンしたときは154.24002あったのにさ」

「そのくらいの違いはでるだろう。0.001ミリ程度じゃないか」人間の身長も朝が一番高く、夜になるにつれ縮んでいくと聞く。よ

くは知らないが。

「ほら、ドアちゃんと閉める。直ぐに出すぞ」

言いながら、スピードメーター横のパネルに手を伸ばす。アリサの身長を登録。続いてシートが感知した体重が自動的に登録される。

さっきの70云々ってやつだ。搭乗者のプライバシーに配慮してか、こちらは画面には表示されない。ふと横を見ると、シートベルトを装着し終えたアリサが、オレの作業を興味深そうに見つめている。

「ねえ、これって何のためにやってるの？」

「何だ。知らないのか？」

意外だった。未登録の知識だったらしい。オーナーの元村が、あまり車を運転しないのかもしれない。

「追突事故なんかの時に、保護機能が働くのは知ってるか？」

アリサが頷く。

「エアバッグが出たり、緩衝シールドを展開したりってやつでしょ？」

「そうだ。エアバッグをどういう角度と密度で放出するか、緩衝シールドを何層に展開するか。搭乗者の身長体重で、最も効果的な値ってヤツが変わってくるんだよ。そのための登録だ」

「ふーん……」

何度も小さく頷きながら、しかし視線は登録パネルから外さない。

こういったものに興味があるのだろうか。まあ機械同士仲良くする
といい。

「理解したか？」

「うんうん、理解した。ありがとっ」

アリスは基本的に、習得した知識を永続的に保有し続ける。メモリに登録されてから長期にわたり使用されることのない情報は予備用のメモリに移されてしまうので読み出しに時間が掛かることはあるが、メモリのどこかには必ず残っている。それだけに、教え甲斐があると言えはあるのだ。

ナビを起動させ、登録してあるルートを呼び出す。シフトレバー

を握った。エンジン音が響き、車が動き出す。

「あ、てかどこいくの？わたしまだ聞いてない」
思い出したように言う。

「どこだと思う？」

「なにそれ。わかんないから聞いてんだっての」

「ちょっとしたサービスだよ。お前のオーナーへのな」

曖昧な物言いだ、隠そうとしたわけじゃない。行き先の固有名詞がとっさに出てこなかっただけだ。だがアリサはそれで得心がいったのか、それ以上の追求はしてこなかった。少し静かになる。アリサが黙ったので、オレも運転に集中することにする。話相手も嫌ではないが、少し疲れてきた。今は静かにしてくれていた方がありがたい。と思っただけならまた話しかけられた。

「あのさ……わたしの調律って、上手くいったんだよね？」

唐突に、しかし随分と真剣な声色だった。わずらわしい質問ならそろそろ無視しようかとも思ったが、そういうわけにもいかなさそう
だ。

「そう思ってるよ。なんだ、不安か？」

聞くと、少し目を伏せて、小さく頷く。先程までの無駄な元気はどこへやら。随分しおらしい。

「お前のオーナー、元村さんの要望どおりに、オレは調律を進めたつもりだ。要件書に書いてもらった条項は無論すべて満たしている。ただし、元村さんが100%満足するかまでは保証できん。つまりところ主観だからな」

可能な限り優しい口調を心がけ、しかし言葉を選んで喋る。あまり適当なことは言いたくなかった。

「わかるけど……。でもさ、アンタが見てる限りでは、わたし上手く、やりとりできてるんだよね？」

少女の声に僅かに焦りが混ざる。どうやら本当に不安らしい。

「ああ。それは間違いない。今までの調律成果に比しても、すごく順調だ」

そう不安がるな、と付け加え、左手で軽く頭を撫でてやる。アリスは驚いたように一瞬目を見開くと、少しはにかんでから僅かに俯いた。旦那様、喜んでくれるかな、などと呟く。大丈夫さ、きっと。

「お前、音楽は聴くか？」

しんみりと、僅かに濡れた空気を振り払うように、話題を転じた。ナビのタッチパネルを操作し、表示をオーディオに変える。取り込み済みの音楽が一覧で表示された。

「好きなのをかける。結構入ってるぞ」

促すと、一応興味は引かれたのか、白い指先が液晶に伸びた。少し前屈みになり、画面をスクロールさせ始める。シートベルトが食い込み、小さな胸が苦しそうだ。

「んー……」

次々に表示を切り替えながら、時折妙なうめき声を漏らしている。画面上に表示されているアーティスト名と、自分の好みとして設定されている情報とを照合しているのだろう。さて何を選ぶのやら。

「んー……」

「おい。まだか」

随分と時間を掛けているので、痺れを切らして声を掛けた。好みの音楽が見当たらないのか。オレは比較的音楽をよく聴く。アイドルと演歌歌手は除いて、オーディオにはそれなりに幅広いジャンルのアーティストが登録してあるはずだ。

「好みの見当たらないのか？」

聞くと、ようやく画面から指を離れた。大きく頷いてうんと言いつ切る。しおらしくいる期間は終わったらしい。

「一個もねえのかよ。お前家ではどんなの聴いてるんだ？」

アリスの趣味嗜好は、オーナーのそれと合致することが多い。オーナーの好みは自分の好み。人格プログラムの基本的なベクトルでもある。元村は恐らく50歳前後。演歌が好みという可能性も、まあなくはない。

「SHARPとか、CLOCK KNIGHTとか……」

ぼつぼつと、よく聴いているらしいアーティスト名をあげる。真逆だ。どちらもアイドルユニットじゃないか。無論オレのオーディオには登録されていない。

「なんだお前、アイドルが好きなのか？」

アリスがあげた2つは、どちらも確か男性数人組みのアイドルグループだったはずだ。しかしやや古い。2、3年前が人気絶頂だった連中だ。幼い外貌のアリスが言う違和感を感じないが、アリスと二人暮らしだと言っていた元村がそれらを聴くとはとても思えない。自分の好みとは別に、アリスの好みを設定したのだろうか。

「まあ、好きって言うか……うん、まあ好きだけど……」
はつきりしない。だが凄まじくどうでもよくもある。

「聴くか？聴くならダウンロードできるぞ」

ナビと一体になったオーディオは、衛星を通じて音楽配信会社の専用サーバにネットワークされている。有料にはなるが、聴きたい曲はタイムレスでナビに落とし込むことができる。

「今はいいよ。ありがと」

アリスはふるふると首を振り、少し勢いをつけてシートに倒れこんだ。

「アトリエ、遠いの？」

まっすぐに前を見つめたまま、唐突に少女は問うた。ああ、そうだ。先刻咄嗟に出てこなかった単語はそれだ。行き先はきちんと伝わっていたらしい。

「いや、すぐに着くよ。もう10分も掛からない」

同じように前を見たまま答える。この先3つ目の信号を左折すれば、あとは一直線だ。

「そっか。あ、てかねえ、喉渴いた」

ころころと話題が変わる。やはりこいつと喋るのは疲れる。

「そういつのは工房を出る前に言えよ」

「だってそのときはまだ喉渴いてなかったんだもん」

返事の代わりに一息を吐き、シフトレバーを握った。路肩に停車

する。

「そこにジャンクショップがある。売ってるだろ」

少し身を乗り出し、助手席側の窓から外を指差す。十数メートル先に、灰色の無機質な建物が見える。見事なまでの長方形で、大きなガラスドアに「JUNK」の文字が記されている。

「買ってくれるのっ？」

急に笑顔になって、しかしやや不安そうに、アリサがオレの顔を覗き込む。

「お前、金は？」

「ポーチの中」

視線を下げ、アリサのシート付近を一瞥する。ワンピースから突き出た白い太股。ポーチらしきものは見当たらない。

「ポーチは？」

「工房の中」

だろうな。工房を出るときから、アリサは何も持っていなかった。

「お茶でいいか？」

「いいよ。お客様から預かった大事なアリスが壊れてもいいのなら」「くそっ」

尻ポケットから財布を取り出し、小さな手に紙幣を一枚握らせる。

一番でかいヤツだ。追いつくように手を振って、早く行くように促した。意気揚々と、アリサが車を降りる。ジャンクショップに駆け込んでいった。小さく舌打ち。工房に戻ったら徴収しよう。

アリスは当然、食物から栄養を摂取するようなことはない。食事は採らないし、採ることもできない。アリスの動作に連動し自動発電されるモーターを装備しているため、電源の供給も勿論不要だ。

稼動状態を維持するために唯一必要なのが、マシーナリーオイルと呼ばれる油だ。水に近い触感の極めて粘土の低い液体で、アリス内部における潤滑油の役割を果たす。オイルの摂取は口から行うため、「喉が渴いた」等という人間臭い表現が為されるらしい。購入時に付属するマニュアルにも記載があるが、「喉が渴いた」は「潤滑油

の残量が残り少ない」と読み替えなければならぬ。まあその表現をオーナーが理解しなければ、アリスは自分で説明を行うことができるわけだが。

「おまたせっ」

プラスチックのボトルを抱えたアリサが、勢い込んで戻ってきた。ボトルから突き出たストロー状のチューブを小さな唇に咥えこみながら、すと右手を差し出す。オレの手のひらに、数枚のコインが乗せられた。

「札は？」

尋ねれば、不思議そうに小首を傾げる。

「いくらだった？」

「9480円」

自分のこめかみが、ぴきりと音を立てたような気がした。よりにもよって一番高価なヤツを買いやがった。いや、間違いなく故意犯だな。

「工房に戻ったら徴収するからな」

痛い出費だが、後で請求すれば何の問題もない。だがアリサは首を振る。

「わたしそんなに持ってないよ。お財布、2000円くらいしか入ってなかったもん」

「……」

もう諦めよう。無言でハンドルを握る。とつとアトリエに行かなければ。

「身体で払うよ、身体で」

音を立ててオイルを吸い込みながら、けらけらと笑う。

「働いてくれるのか？」

肯定されても、あまり期待は持てないが。アリサはまた首を振ると、少しイタズラっぽい顔つきで、ワンピースの裾をちらりとめくって見せた。白く細い太股が、尻近くまで露になる。期待してるくせにーなどと嘯く。

「調子に乗るなロボ」

「ロボって言うなっ」

くだらないやりとりで時間を費やす内に、目的地に到着した。オレの工房より一回り大きい、洒落た外観の建物。「Atelier HIBINO」の看板が外壁に見える。3台ある駐車スペースの一番奥に停車すると、エンジンを切った。オイルを飲むことに夢中になっているアリサを追い出し、オレも車を降りる。アトリエを見上げた。

・ Chapter 1 アリサ 【4】（後書き）

序盤も序盤ですが、読んでくださった方、続きを読もうと思ったださった方、ありがとうございます。

次回投稿10月30日（日）予定です。

ヨーロッパアンスタイルのやや古風な建物には全体に流麗な装飾がなされ、さながら小さな宮殿のようだ。2階に見えるガラス張りの温室が目を引くが、あれは経営者の趣味だろう。入り口に近づくと、木製の自動ドアが左右に開いた。来客を告げるオルゴールの音色が控えめに響く。

「いらっしやいませ。……あら冬治さん」

受付のカウンターに座っていた女性がオレの姿を目に止め、一瞬驚いたような顔になる。すぐに笑顔を見せてくれた。

「美優ちゃん久しぶり。孝一のやつは？」

「いますよ。ちよつと待つてくださいね」

カウンターに乗せられた旧式のベルが、細い指先に鳴らされる。目的の人物は2階にいるようだ。すぐに降りてくるだろう。

「今日はどうしたんです？冬治さんの方からいらっしやるなんて、驚きました」

言って、オレの背後からきよろきよろと辺りを見回しているアリサに目を止める。声を出さず、唇を動かした。「冬治さんの？」「そう聞いているようだ。首を振って否定する。」

「ほらアリサ、挨拶しろ」

促すと、アリサはおずおずと前に出る。

「このアトリエの主人、孝一って言うんだけど、オレの知り合いでな。で、こちらは奥さんの美優さんだ」

「はじめましてアリサちゃん。日比野美優と言います。よろしくね」
少しかがみこむようにして、アリサの顔を除きこんだ。美優は女性としては背の高いほうだ。アリサとは10センチ程度身長差があるように見える。はねっかえりがきちんと対応できるか不安だったが、予想に反してアリサは丁寧な頭を下げた。

「アリスTタイプ3200、アリサです。よろしくお願ひします」

美優が微笑んで応じる。

「クライアントのアリスでさ。丁度調律が終わったところなんだ。メイクと髪型のサンプルが採りたくてね」

「あら。それも依頼として受けられたんです？」

「まさか。時間が空いたからね。オーナーさんが調律後にアトリエを使うようなこと言ってたからさ、サンプルだけでもいくつか提示してやるうかと思ってね」

元村から調律依頼を受けた際に、相談された内容を思い出す。僅かだがアリサの外見を変更したいらしく、その場合どうするべきかというものだった。何をどのように変えたいか、元村が丁寧に説明してくれたので、CGで作成する変更後のサンプル画像を、アリサの引き取り時に渡してやるうかと思ったわけだ。本来不要なサービスだが、アリサに対する調律に元村がケチをつけてくる可能性が多少ながらも懸念されたので、それを封じる狙いがある。

アトリエは、調律工房と同時期に生まれたアリスオーナーを客とする施設だ。調律工房がアリスの内面の改修を担当するのに対し、アトリエは外面の変更を業務とする。髪型や瞳の濃紺といった些細なものから、顔の造作や体型等、人間で言うところの整形手術に相当する大掛かりな変更まで幅広く請け負う。アリスの外貌は、購入時に各パーツ毎に好みのものを選ぶことが可能であり、その選択肢は組み合わせにして数万種類に及ぶ。自らの好みにあった容姿を持つアリスをパートナーとすることができるわけだが、とはいえ飽きはどうやっても訪れるもの。容貌の変更が可能とあれば関心を引かれるオーナーは多く、アトリエは商売として十二分に成立し得る状態にあるのだ。

「なんだ美優、いたのか」

階段を下る足音が響き、大柄な影が受け付け前に姿を現した。

「冬治さんがいらしてるのよ。可愛い子連れて」

「可愛い子？」

アリサの肩に手を置き、二階から降りてきた男の前にそっと押し出

す。男の目が僅かに見開かれた。

「朝倉、お前アリスを買ったのか？」

大柄な体躯と、それに比しても大きな顔が目を引き髭面の男性。このアトリエの主人だ。

「いや、クライアントのアリスだよ。今日はちょっと頼みがあつてな。ほら、アリス」

少女の背をもう一度軽く押し、先ほどと同じように挨拶を促す。美優に対してと同様、アリスは丁寧に頭を下げた。

「お、礼儀正しい子だね」

豪快な笑みを浮かべ、孝一はかがみこんで応じた。

「日比野孝一です。こいつとは古い付き合いだね。今日は来てくれてありがとう」

髭面の強面だが、笑うと妙に人懐っこい顔になる。アリスは笑顔でいえ、お世話になります、と返した。恐らくは先刻のやりとりで、美優と共に孝一の印象値は高めに設定されたはずだ。

「さて、朝倉」

立ち上がって俺に目を向けると、孝一は右手を上げ、太い親指で階段を指し示した。

「詳しい話を聞こうか。上に行こう」

「ああ、悪いな。アリス、お前はここで待っていてくれ」

孝一の背に続き階段に足を掛け、向き直って少女に告げた。

「はい、先生」

可愛らしい笑みを浮かべて答える少女の外面に辟易しながら、二階へと上がる。散らかり放題の研究室の中ほど、シンプルな応接セツトに案内された。

「まあ座れ」

促され、ソファに腰を沈める。ここへ来るのは数ヶ月振りか。来るたびに研究室には物が増え、雑多な気配も増していくように思う。

「お前、いつもここで客と話してるのか？」

テーブルを挟んで向かいに座った孝一に呆れ果てて問いかければ、

いやいやと、毛むくじやらの手を振って答える。

「いつもは下だよ。綺麗な応接セットがあったらう。オシャレなやつが。まあ買ったのは女房だが」

「ああ、そういえばあったな。お前には選べないセンスのいいやつが」

苦笑して答える。孝一との付き合いは長い。ある程度の軽口は挨拶代わりのようなものだ。

「で、今日はどうした。アリス連れて来るなんて初めてだろう？」

「ああ。まあちよつとな……」

簡単に事情を説明する。得心がいったのか、孝一は大きく頷いてみせた。

「それじゃ、とりあえずサンプルを撮ってみるか。連れてきてくれ。ああ、型番はなんだったっけ？」

「Tの3200だ」

髭面が軽く頷くのを確認し、一階へ戻る。先刻話題に出た応接セットで、アリスは美優と談笑していた。手元にボトルは無い。飲み終わったららしい。

「アリス、来い」

呼ぶと、美優に一礼してから駆け寄ってきた。微かに引きつったオレの表情に気づいたらしく、妙に顔を寄せ、何よ、と唇を尖らせる。

「いや、大した狸だと思っただけな」

「たぬき？」

声をひそめて告げてやれば、忙しく辺りを見回す。この表現は通じなかったようだ。

「ほら、あがるぞ」

手を引き、振り払われ。階段を上った。

- Chapter 1 アリサ 【5】 (後書き)

予定より早めで。

次回投稿10月30日(日) 予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9026x/>

機巧アリスに口付けを

2011年10月26日02時02分発行